

2018年度 清澄フィールドキャンプ 実施報告

(ニュースレター2018年10月号掲載)

2018年8月20日から25日にかけて、京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学の先生方の御指導・御支援のもと、関東支部は清澄フィールドキャンプ（地質調査の演習；以下、清澄FCと略記）を共同実施した（参加者3名）。

清澄FCの参加者には、実施約1ヶ月前から、地質学および地質図学演習の課題が与えられる。初日の8月20日には、参加者は、京大生が東京大学千葉演習林清澄宿舎に到着する前に、歩測や走向・傾斜の計測の練習を行った。2日目以降、京大生とともに、日中は七里川およびその支流で沢歩きをし、夜はルートマップとフィールドノートへの墨入れ・柱状図の作成を行った。参加者は完成するまで寝られない。コンビニのない場所で缶詰状態になって肉体的にも頭腦的にも追い込まれることとなるが、参加者にとって貴重な体験となったと思う。最終日、参加者には関東支部発行の修了証が手渡された。

台風20号の影響で、8月24日の午前中は、宿舎でのステレオ投影の演習に切り替えられたが、ほぼ予定通りの踏査をして、終了した。

清澄FCは、地質図学演習という科目を受けることができない、あるいは、できなかった学生さんに、その機会を与えるものであり、地質学の「真髄」を守る極めて重要な事業の1つと考える。

開催にあたり、京都大学の山路 敦先生、松岡廣繁先生、佐藤活志先生、TAの阿部氏、福田氏から多大なるご支援を賜った。また、関東支部側の指導者として、石油資源開発株式会社の坂田龍玄氏、株式会社ダイヤコンサルタントの吉田真理夫氏にはお世話になった。東京大学千葉演習林の方々には、いろいろとご協力をいただいた。以上の方々に厚く御礼申し上げます。

(関東支部幹事 加藤 潔 駒澤大学)

<参加者の感想>

私は地質調査の方法や技術を学ぶために、清澄フィールドキャンプに参加しました。1つの露頭で長い時間をかけて観察し、フィールドノートに丁寧に細かく柱状図を描くということは、今まで行ったことのない作業でした。

実習中はフィールドでも夜の屋内作業でも、京都大学の学生の方々についていくだけで精いっぱいでした。しかし、日が経つにつれて露頭の記載の内容や方法、柱状図の書き方も身につく、最終的には京都大学の学生の方々に遅れることなく課題を進めることができました。

今回のフィールドキャンプでは、フィールド調査の技術や柱状図の書き方のほか、ヤマビルに耐える強い精神力も身につけることができました。何か所もヤマビルに血を吸われてしまいましたが、それを気にすることなく調査に集中して取り組みました。

体力的にも精神的にも辛い6日間の実習でしたが、とても充実したものになりました。この経験を活かしてさらに地質に関する勉強を重ね、これからの研究に取り組んでいきたいと思えます。

(専修大学3年 木村恵樹)

私は、授業ではできない地質の勉強をするよい機会であると思ひ、今回の清澄フィールドキャンプに参加させていただきました。

フィールドでは、京都大学の生徒との経験の差を実感させられ、ついていくのに苦労しました。また、慣れない室内作業に苦戦し、前日の作業から進め、また次の日という繰り返して、1日がとても長く大変でした。けれど、フィールドで地形や地層を見るときに、何に注意しているのか、どういう見方をするのか、といったフィールドを調査する方法を、とても丁寧に指導してくださり、例えば、走向と傾斜をただ機械的に測るのではなく、前の地点と何か異なっていないかなど、様々な作業やデータの一つ一つに意味があることを学ぶことができました。

今回参加させていただいたことで、基本的な調査の仕方や地質について、大変勉強になり、新たに興味関心を持つこともできました。ここで得た知識を、今後の調査に活かしていきたいとおもいます。

(専修大学3年 大村レイ)

私は幼少より地球科学に強く興味を惹かれており、来年度には地球科学の知識を駆使して資源を探り当てる探鉱技術者としての就職が決まっております。しかし、地学系学科の出身ではないことに加え、大学院では主に海底資源を研究対象としていたことから、陸上における地質調査をほとんど経験したことがないという状況にありました。そのような折にこのカリキュラムの存在を知り、就職に先立って地質調査の基礎を実践的に学ぶことができる良い機会であると考え、この度のフィールドキャンプに参加させていただきました。

堆積岩や地質構造に関しては知識としては学んだことがあったものの、現場で実物を同定するのは今回が初めての経験でした。そのため、はじめのうちは砂岩と泥岩の区別もつかず、走向傾斜も機械的に計測を繰り返しているような状態でした。しかし、幾度となく露頭の観察や走向傾斜の計測を重ねた結果、ついには岩相の判別や構造の把握を自力で行えるまでに至りました。また、地質作用の産物である堆積岩やその構造を自らの目で観察したことで、今までは教科書上の知識のみで漠然と捉えていた地質現象をより具体的にイメージできるようになり、「経験が知識を洗練する」ということを改めて実感させられた六日間でした。

沢にはヤマビルが非常に多く、ヒル除けの手放せない大変な調査ではありましたが、おおよそ天候にも恵まれ無事にカリキュラムを修了することができました。ご指導を賜りました京都大学および地質学会の先生方には、この場をお借りしてお礼申し上げます。誠にありがとうございました。就職した暁には是非とも今回の経験を活かして探鉱の業務に励みたいと思えます。

(下村遼 東京大学博士1年)